

日本民藝館所蔵の建築明器の屋根

1 はじめに

2020年6月25日に東京都目黒区の公益財団法人日本民藝館（以下、日本民藝館と表記）において建築明器の調査をおこなった。この建築明器は瓦葺き屋根を表現しており、省略された部分も見られるが、当時の瓦の葺き方をある程度写実的に象っていると考えられる部分もある。この建築明器の屋根は、東アジアにおける古代の瓦の葺き方を検討する材料となり得るものと考えるため、以下、その概要を報告する。

2 建築明器の特徴

日本民藝館所蔵の建築明器（以下、本例と表記）は、学芸員の白土慎太郎氏のご教示によれば、館を創設した柳宗悦氏が戦後に日本橋で購入したものであるが、その出土地などは不明とのことである。日本民藝館では、中国漢代の厨子形明器（資料No.6022）とされている。

中国では、人物や動物、さまざまな器物や建造物などを模した明器、俑を墓中に納める習慣があり、その素材は陶製、木製などさまざまなものがある。建物を模した明器は前漢代には存在し、それ以降も盛んに作られた。その種類は家屋、楼閣、家畜小屋、倉などさまざまである。屋根の表現については、特に後漢代のものに軒丸瓦の瓦当文様を表したり、丸・平瓦を一枚ずつ表したりするなどの精巧なものがある。また、屋根の成形には型作りによるものと手づくりによるものとがあり、後者には屋根や瓦を比較的精緻に表現したものが多い。

本例は総高49.5cm、平側の屋根の幅が41.5cm、建物（壁部）の幅が33.0cm、妻側の屋根の幅が29.5cm、建物（壁部）の幅が20.2cmである（図39）。壁には白色の付着物が残り、本来は白土や漆喰などを塗っていた可能性が考えられる。切妻造りの単層の高床建物で、平入り側中央の間口幅18.2cm、高さ19.7cmの入口に大きな両開き扉を表現し、扉の両脇に上下幅8.2cmの門鎌を取り付ける。ただし巻頭図版1掲載の門は後補のものとのことである。扉のある面以外の3面の壁には窓やそのほかの表現がまったく見られない。これらの構造から見て本例は倉を模したもの

のと考えるのが妥当であろう。床の四隅に幅4.0cmの柱を表現し床高6.2～6.5cmの高床とするが、扉がある平入り側の左右の柱は熊の全身を象る。

3 瓦の葺き方の表現

屋根の軒先には軒丸瓦の瓦当部を表現するが、丸・平瓦を1点ずつ線刻などで表現することはせず、丸瓦筋を幅2.0cm程度の細長い半円筒として表現する。軒平瓦・平瓦の表現を省略するため、切妻屋根の上に丸瓦筋と大棟をのせたような形状となる。丸瓦筋は各5本表現され、間隔は5.0～6.0cm程度であるが、中央の1本とその両側の間隔がわずかに狭い。

軒丸瓦の瓦当部は円形で、直径は丸瓦筋の幅よりわずかに大きい2.5～2.7cm程度、中央に直径0.6cmの小円文を配する。この小円文はいずれも形が整い直径が同じであるため、細い管状の工具を刺突して施文したものと考えられる。

切妻屋根の妻の端部、破風の上の蝶羽部分には、軒丸瓦状の掛瓦（掛巴瓦）の瓦当部と丸瓦部を表現する。通常の掛瓦は屋根の流れに垂直に葺かれるが、本例では屋根の流れに対して斜めに葺かれ、通常の掛瓦の葺き方と比べ約30°斜位をなす。このように切妻屋根の掛瓦を斜位に葺く表現は、後漢代の建築明器に類例がいくつか認められる。掛瓦の瓦当部は円形で直径2.0～2.2cm、丸瓦部の幅は1.7cm程度であり、軒丸瓦および地葺きの丸瓦筋より一回り小さい。瓦当部と丸瓦部の取り付け角度は、通常の軒丸瓦と同様に瓦当部が丸瓦部の主軸に対してほぼ垂直に取り付くが、わずかに（10°程度）斜位をなす部分もある。なお、掛瓦の丸瓦部先端を降棟に差し込むように表現されているが、この降棟にあたる丸瓦筋は通常の丸瓦筋と幅、高さともに変わらない。

軒隅部分では、降棟にあたる丸瓦筋のさらに軒隅側に軒丸瓦を配し、掛瓦の丸瓦部側面、瓦当面から約3.0cmの位置に、丸瓦部先端を斜めに差し込むように表現されている。この表現は扉のある面の屋根にのみ存在し、もう一方の屋根には見られない。

4 大棟端部の納め方

大棟端部には軒丸瓦3点を組み合わせる。雁振瓦も丸瓦筋と同様に、1点ずつ表現せず幅2.0cm程度の長い半



図39 日本国立民族学博物館所蔵の建築明器（扉を外した状態。扉を閉じた状態は巻頭図版1に掲載。）

円筒として表現するが、大棟中央には長さ3.0cm程度にわたり粘土を貼り付け分厚くした部分がある¹⁾。

漢代の遺跡から出土した建築明器の棟端表現は、棟端に軒丸瓦を積み上げて小口を塞いでいるものがほとんどである。本例のように棟端に軒丸瓦を2段積むものほか、3段積むものもある。軒丸瓦を積み上げる意図は、棟端を徐々に高くすることで棟に反りをつけ、見栄えを良くするためである。

現時点で、中国における鬼瓦や鷲尾の出土例は北魏代までしか遡らないため、少なくとも南北朝期以前は、軒丸瓦を積み上げて棟端を塞ぐことが一般的であったと考えられる。本例はそうした当時の葺き方を反映した表現といえよう。

5 まとめ

今回調査した建築明器は、掛瓦や大棟端部の納め方の表現の特徴など、後漢代の建築明器と共通する部分が多く認められ、このころの製品である可能性が十分に考えられる。また、平瓦などの表現を省略するものの、軒丸瓦、大棟端飾り、大棟中央部の表現などは詳細であり、当時の瓦の葺き方をある程度写実的に表しているものと考えられる。

掛瓦が屋根の流れに対して斜位に葺かれた表現となっている点については、本例以外にも後漢代の建築明器に類例が認められることから、少なくとも後漢代には、切妻屋根の掛瓦を斜位に葺くことが実際におこなわれていた可能性が高い。こうした掛瓦の葺き方が、統一新羅時

代の慶州地域、渤海、ウイグルの都城などで出土する特殊な形状の軒瓦（斜方向軒瓦）の用途に示唆を与えることは、すでに他稿において詳述したので省略する²⁾。

以上のように、本例を含む建築明器に見える屋根の表現は、部分的な省略や誇張の可能性に十分な配慮が必要であるものの、未だあきらかになっていない古代の瓦の葺き方や用途不明の道具瓦の用途などについて、多くの情報をもたらす可能性を秘めている。今後も同様の調査や検討を続けたい。

（清野孝之・岩戸晶子）

謝辞

調査に際しては公益財団法人日本民藝館の白土慎太郎氏、杉山享二氏に大変お世話になった。また、写真撮影には栗山雅夫の手を煩わせた。末筆ながら記して深甚の謝意を表したい。

註

- 1) この部分は、大棟左右両端から中央に向かって丸瓦を葺き、最後に両側からの丸瓦端部が接する部分に別個の丸瓦を重ねて納めた状況を表したものと考えられる。当時の大棟の構築状況を示すものとして大変興味深い。
- 2) 掛瓦を斜位に葺く方法と斜方向軒瓦の関係については、清野2021の記載を参照いただきたい。なお、実物を観察しておらず写真でしか確認していないが、遼寧省遼陽市遼陽北園3号墓出土建築明器は、掛巴瓦の瓦当部が丸瓦部に斜位に取り付き、瓦当部が橢円形をなすように見える部分がある。

参考文献

清野孝之「斜方向軒瓦の基礎的研究」『日韓文化財論集IV』（奈文研学報100）201-227頁、2021。